平成 28 年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究

戴冠式の玉座と石にみる象徴性 (註 1)

報告：服部等作

1. はじめに

玉座は、王や貴族用に特別制作された椅子(註 2)、あるいは椅子が玉座から派生した(註 3) とする見解があるが、ここには玉座と椅子を混同する内容がある。

玉座は、法王、皇帝、天皇、あるいは現人神と讃えられる天子の御座所とも称し空間性をそなえ、座主不在の空席が〝坐(い)ますが如く〟と単なる座具にはない象徴性を帯びている。

玉座が注目を集める戴冠式は、王冠を被り王権継承を象徴する儀式であると同時に玉座の座主、ならびに王杖の授与で正統な後継者が再生する場である。

王権継承の儀式は、紀元前三千年紀のシュメール文明に始まる長い歴史があり、空席の玉座が座主の〝死〟や権力の交代に伴う座主を象徴する空間であり(註 4)、新たな座主の再生(復活) を象徴的、時に呪術的に表象する。そのため儀式は、起居の文化と継承の正統性を示す玉座、王冠、王杖の威儀具 (宝具、神器)(註 5) が加わる。王権交代は、現在欧州の十王国で英国王室が戴冠式に玉座、王冠を使うが、他の王室は、就任式を行う(註 6)。日本では皇位継承で大嘗祭の即位礼に該当する。戴冠式を経ない権力交代は、座主の死、後継者の不在による断絶、革命や政変など玉座を標的に謀反や簒奪により権力が奪取される時がある。以下に戴冠式と玉座が秘める呪術性を述べる。

2. 英国王戴冠式の玉座

戴冠式は、段階を重ねてすすむ。まず準備の段階で新らたに即位する王が禁欲的に生活(断食、浄身)を実践し、王名を授かる新王が選別される承諾手続きの後、正統な継承者となって戴冠式に出席する(註 7)。

図 1.1 に英国女王のスクーンの石を敷く玉座(註 8)、2.1　戴冠式の特徴的な玉座とその空間、図 1.2 に英国女王への王杖授与、図 1.3 に英国女王の戴冠と玉座倚座像を示す。

(1) 戴冠式と玉座

現在の英国女王エリザベス (二世) は、父のジョージ六世逝去の後、ロンドン・ウエストミンスター寺院 (Westminster Abbey) で歴代の英国王の戴冠式に用いた玉座、王冠、王杖といった威儀具と共に(註 9) 1953 年 6 月 2 日の戴冠式に臨み英国の王権継承者となった。

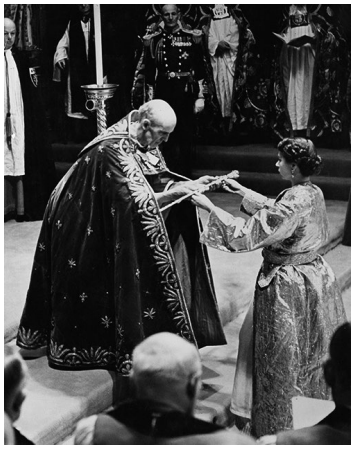
玉座の象徴性は、宿敵スコットランドのスクーン城から戦利品として奪った「スクーンの石 (Stone of Scone)」を尻に敷く玉座を威儀具として戴冠式に臨む点にある。

スクーンの石の由来は、1296 年に英国エドワード一世王 (在位 1272 ～ 1307 年) がスコットランドに戦勝しスクーン宮殿の石を戦勝記念に持ち帰った。後に石の割れを防ぐため座面の下に鉄の鎹で封じ込んではめこみ、さらに四脚の下に獅子を配置し、さらに背板、肘当てを加え、ダーハムの木工師が 1297 ～ 1300 年頃に製作した簡素な木製玉座とした。玉座は、エドワード一世の時代(在位 1272 ～ 1307 年) 頃から戴冠式で使われたとされる。スクーンの石の歴史は、古くスコットランド王の十字軍が遠征地でヤコブが神の家で枕にした「ヤコブの石」として旧約聖書に以下の記述が伝わっていて後にスコットランドの守護石とされた(註 10)。

ヤコブが石を枕に一夜を野に伏した時、夢に神の使いと神を見て , 眠りからさめ、「これは神の家である。そうだ、天の門である」と言い、枕にした石を立て油を注ぎ、その場所を神の家 (ベテル) と名づけた。ヤコブはまた誓願を立て言った。「神が私と共におられ・(中略) ・主が私の神となられるなら私が記念碑として立てたこの石を神の家とする」。

(旧約聖書・創世記ー第 28 章・ヤコブの夢)

［図 1.1］英国王の玉座
座面下にスクーンの石を敷く
(Graham, Clare-1994。Pl.47)



［図 1.2］英国女王への王杖授与
(BBC News より引用)

［図 1.3］英国女王の戴冠と玉座倚座像
(BBC News より引用)

スクーンの石、すなわちヤコブの石の呪術性は、戴冠式で王が着座する玉座の下の石が十字軍、すなわちキリスト教の戦勝の象徴であり、同時に、宿敵スコットランドを封印する呪いとなる。さらに玉座の形態は、キリスト教の指向を反映して玉座の背板が、先端が尖り、あたかもゴシック建築様式の教会が天の神キリストと通じるデザインとなっている。その効果は座主の身体がくずれないよう背板に沿い、座面に肘当て囲み、威儀を正し倚座姿勢の型をとれる工夫がある。玉座の下は、獅子を装飾し四方を守護する。さらに基壇、足台により、玉座の座主（女王、すなわち地上における神の代理人となる）が誰にも地平で接することなく不可侵な空間ごと玉座の形（形態）を際立たせる。[図 2.3]

スクーンの石の上で女王エリザベス二世の戴冠式は、25 歳で英国ウインザー朝第 4 代王として国家と国民、英国国教会を率いる首長、および大英連邦国王となり英国史上二番目の前例のない長期の在位期間の英国王となった。

(2)　戴冠式の象徴性

図 2.1 にウエストミンスター寺院の十字架を象徴する内部配置を示す。［図 2.1］

ウエストミンスター寺院は、国王ヘンリー七世の墓所と礼拝堂をもち 1258 ～ 1375 年に国王ヘンリー八世の建設資金でフランス国王の戴冠式を行なう高さ 32m のランス大聖堂を目ざして建築された。教会の平面は、十字架状の平面を形作る内陣に放射状回廊がヘンリー七世の礼拝堂、歴代王の墓所を周り十字形の内陣を天蓋で覆い半円球のドームがのる殉教者の霊廟のゴシック様式建築である。

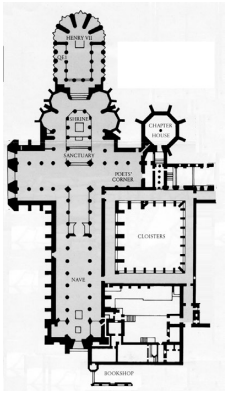
図 2.2 に戴冠式の玉座天蓋を示す。天蓋は、もともとの教会にあった殉教者の記念堂を包み込むための空間となる。その平面形は、長方形のラテン十字で方形のギリシャ十字ではない。この十字が生み出す正ドームの下で玉座を設け昇降用の階段をつけ玉座への動線を設けて式を行なう。こうして天の神＝キリストが天下(地上）で王となって天上と天下が交流する、いわば現人神となってその役目を果たす。そのため天下にあって天の代理を果たす女王は、象徴的な存在であり、王の家族、臣下、ならびに何人たりとも玉座と地平を接しない、階段状の基壇、足台、基壇、天蓋に意図が込められている。

図 2.2 に戴冠式の玉座天蓋を、2.3 にハロルド王の玉座倚座像と天蓋を示す。

キリストの教会で行われる女王の戴冠式の流れは、女王の寺院到着後の宗教儀式で始まる。

1）臨御：女王は、英連邦諸国の象徴を刺繍した白いシルクのドレスをつけた上に長さ 5 メートルを越すベルベットの儀式着を着け、女官 7 名がトレーンを捧げ持つ。王冠などの宝具を持つ行列に従い寺院の内部を巡り着席する。 2）承認：英国国教会の大司教の先導で女王が参会者に向かい、自から即位の承認を取りつける。女王が祭壇で戴冠式の宣誓－正義と英連邦王国の法の遵守、英国国教会の教義を守ること、国の栄光と神を讃え宣誓する。ここには王位継承の後継者が自ら、または議会が（王位の廃止もできる）承認をするか、1701 年に定められた王位継承の考え方が選択できるようになっている(註 11)。正しく統治する王となるべく戒めて承認される。

3）奉献：女王が大司教から聖書、聖体器、聖杯を授受して神前に奉納する。 4）即位の宣誓：聖書に手をのせ神の法と福音の言葉を守り、正しい統治を実行する旨の誓いを王冠、王杖、様々な威儀具、宝具と共に神に跪き（跪座）宣誓する。この式の最も古風で神聖な瞬間として、女王は戴冠式用の椅子に威儀をただして座り、 5）塗油：カンタベリー大主教により油を十字に塗られる。大司教が女王の頭頂・胸・両手掌に清めの精油を十字に塗る。これで女王が聖別される。 6）王衣の着用と王器の授与：王衣、拍車・



［図 2.1］ウエストミンスター寺院の内部と十字架の象徴性

［図 2.2］英国女王（中央）の戴冠式と玉座 - 天蓋の空間

［図 2.3］ハロルド王の玉座倚座像と玉座天蓋（註 8 -Pl.46）

剣・腕輪・玉・指輪・笏など王の象徴が渡される［図 1.2］。7）加冠：王冠の授与は最後になる。法衣をまとう女王に大司教が王位の印となる剣・笏・指輪、宝珠、ローブ、そして人々が歓呼する間に女王が王冠をかぶり、王杖を手にもち玉座につく［図 1.3］。大主教が剣と王笏の宝具を女王に授け、女王が「私はここに誓ったことを果たし、守ります。神よ、力を与えたまえ。」と宣誓の瞬間、人々が「女王陛下・・・万歳！」と歓声をあげる。

以後、正式に即位した女王に聖書献呈、国王奉戴礼として女王に大臣、参列者拝礼が続く。臣従礼で新国王へ期待を表明し臣下が忠誠を誓う。8）聖餐：女王が戴冠後の礼を行ない、新王の聖餐を授かる即位儀礼が終了する。

3　玉座の呪術性と象徴性

エリザベス女王戴冠の儀式は、十字架状の教会の、地上における神を代理する神殿の役目を果たす教会が儀式の空間となる。ここでは玉座、王冠、王杖、ならびに威儀具すべてが神への献呈品である。

図 2.3 にハロルド英国王の玉座倚座像を示す。1066 年頃の玉座を表すタペストリーは、エドワード一世以前のスコットランド王家の玉座の形態を伝える。載冠式で衣服に隠れたエリザベス女王の座姿勢と英国王ハロルドの座姿勢の型（カタ）と玉座の形（カタチ）（形態）が比較できる[註 8-2]。ハロルド王の座姿勢は、壷をもち正面向きに足を揃えて足台に両脚をそろえ基壇、天蓋を備えた空間に威儀を正した王の〝席地而座（坐）〟と呼ぶ足を垂らし座面に身体をよせる倚座姿勢の型で表現する。倚座姿勢の型は、単に腰掛けや床に座る姿勢でなく、暗殺や簒奪といった緊急時にも所作、起居、姿勢まで威儀を正す必要があった。玉座の周囲は、左を戦士、右を司祭と平服の有力者が王を祝福する。

図 3.1 にスコーンの石を溯るヤコブが枕にした石[註 12] と神殿を表すフェニキアの都市ティルスで前三世紀頃の銅貨図像を示す。表側は、ティロス第一神殿前庭でヤコブが夢みた二つの石柱（マッツェバ）、右にオリーブの生命樹、銘文ティロスの下に泉を、裏側に神の家の神殿と内部の香炉を表す[註 13]。図の内容が「ヤコブは次の朝早く起きて、枕にした石柱にバター、油、蜜と先端にオリーブ油を注ぎ[註 10]、神殿の祭壇に備えた」記述（旧約聖書 - 創世期 28：18）にあたる。さらにヤコブが石を天にささげ「私の神、私が身を隠す事のできる私の大岩」の記述（旧約聖書の詩編 18：3b）にある。ヤコブが枕にして神を夢見た象徴的な「形」の石は、人々が捧げる神殿、神の家、祖先や殉教者の霊廟（マルテリウム）、その内部で新たな王の象徴となる玉座、王冠、王杖（錫杖）といった神の憑代である。つぎに「型」は、新たな王権（皇位）の継承ー死と再生儀礼により地上における現人神として戴冠式で神性を帯びた所作をとる。ヤコブの石の獲得は、十字軍遠征の夢であり、実際にスコットランドのスコーン城に持ち帰った。後にスコットランドに戦勝した英国（イングランド）王エドワード一世がスクーンの石を玉座座面下に敷き戴冠式で用いた。ここに石は玉座の象徴性で大きな役目を果たした。

3. 石の玉座と呪術的な象徴性

ここでスコーンの石（ヤコブの石）を尻に敷く玉座の象徴性をたどる。

3. 1　オンファロスの石の玉座と図像

図 3.2 にギリシャのデルファイのアポロ神殿出土の地球のオンファロス（Omphalos：臍（へそ））と呼ぶ石を示す。

まずオンフォロスに腰掛ける座の象徴性は、古代ギリシャ人が地球の臍（オンファロス）として地球の中心から地震や津波を引きおこす呪術的な威力を畏怖した。現在デルファイの神殿博物館に置かれている石は、弾頭状の石に網をかけ地震を抑える表現をする。オンフォロスが出土したアテナイ北西 180km のデルファイのアポロ神殿[註 14]

［図 3.1］ヤコブの石と神の家
神の家を表したビブロス銅貨（註 13）

［図 3.4］ゼウス頭像（表）ー
放牧神パンのオンフォロス座像（裏）（註 15-2）

［図 3.2］地球の中心オンフォロス
（デルファイ博物館）
（撮影 服部）

［図 3.3］デメテール女神 (表) ー
アポロ神オンフォロス座像（裏）（註 15-1）

［図 3.5］アケレオス川神（表）ー
アポロ神石製玉座座像（裏）（註 15-3）

は、アポロン神が神托儀式を行なったとされる。その由来は、ギリシャで全能神・ゼウスが使者の鷲を東と西の二方向に放った後、デルファイに舞戻ったため世界の中心がこの地にあるとした。

ギリシャ人は、地震をおこし破壊力があるオンフォロスを鎮めるべき石と捉え、石の上にアポロン神が腰掛け震源を鎮める様子を貨幣図像に用いた。一方でアレクサンドロス大王（在位前 336 年～前 323 年）は、全能のゼウス神で玉座倚座像を表現した。

王の死後も東方遠征によるギリシャの植民地シリアやエジプトの王朝、および最後にはインドのグプタ王朝貨幣までオンファロスの石と神の座像の表現がつづいた。神の玉座はオンフォロス、石製、銅製と組合わせ頻繁に登場する。貨幣は、王自らのプロフィールと統治意識を領民に知らしめ、様々な信仰に寛容な姿勢を示すためである。

図 3.3 から図 3.6 にオンフォロス上の貨幣の座像を示す。ギリシャ世界で全能のゼウス神の玉座倚座像をはじめ、オンファロスの石の上のアポロン神座像の組合わせた類例がギリシャから東方のインドの王朝まで貨幣に表現された。デメテール女神と玉座座像［図 3.3］(註 16-1)、ゼウス神頭像（表）と放牧神パンのオンフォロス座像（裏）［図 3.4］(註 15-2)、治水のアケレス神頭像とアポロ神の石製玉座像［図 3. 5］(註 15-3)、アレクサンドロス大王の死後シリアにセレウコス朝（前 280 ～ 261 年）を興したギリシャ人のアンテオコ一世から七世まで貨幣表側に正統な王権を象徴する王の頭像と王の銘、記号、裏にオンフォロス座像をはじめ大王の座像を模し右手に知恵の象徴である鷹を、左手に王権を象徴する王杖を持ち、玉座に座る様々な玉座像を発行した(註 15-4)［図 3.6、3.7］。オンフォロス上の神の座像をもつ貨幣は、シリアを経てアジア内陸のバクトリアからヒマラヤ一帯にかけグレコ・バクトリア朝（前 255 ～ 55 年）のエウテェデモス王（前 235 ～ 200 年）、エウクラテデス王（前 171 ～ 155 年）、イラン系アルサケス朝パルティア帝国（前 128 ～ 88 年）のテァラーテス王、ミトラダテス一世、二世貨幣の座像、騎馬民族ンド / スキタイ朝でスパラガダマ王（前 60 ～ 50 年）と多数あがる。イラン系のクシャン朝貨幣（一世紀半～ 3 世紀）は、オンファロス上の座像表現がなくなる一方で豊穣神（アルドクショー）玉座座像となり、インド・グプタ朝のチャンドラ・グプタ一世王（在位 320 ～ 335 年）、二世王（在位 376 ～ 414 年）のオンフォスの上の豊穣神（ラクシュミー）座像の貨幣図像(註 17)［図 3.7］に引きつがれ、五百数年も呪術的な石と座像表現が続いた。

3. 2　玉座と姿勢の型（カタ）と玉座の形（カタチ）

ギリシャの文明世界で地震を鎮めるオンフォロスの石と英国のスコーンの石を用いる玉座の象徴性は、姿勢の型（カタ）と玉座の形（カタチ）から考えてみたい。

〝死－再生〟を象徴する戴冠式という交代儀礼で王の威厳と尊厳ある所作、特に玉座での座姿勢－〝垂足而座〟の倚座、および〝席地而座〟の平座（床座）の二つの姿勢の「型」が威光を放つ。〝倚〟と〝座（坐）〟の漢字のもととなる甲骨文字（象形）の語形は、姿勢の形に由来し、前者の〝倚〟の象形が力の象徴物（剣や杖、棍棒、玉座など）に身を寄せる姿勢(註 18-1)であった。身を安定させる背もたれ、肘当て、足台に身を寄せる意味（語義）から、単に腰掛けやスツールの類いと異なる王にふさわしい玉座の形を必要とした。次ぎに〝座〟の象形は、対面する二人が土にたてた棒に神の審判を仰ぐ際の姿勢である(註 18-2)。以上両座法共に神に対峙する際の姿勢である。玉座の座主は、拘束されないように前稿にあげた即位礼における御椅子（赤漆欟木胡床とも称する国宝で唯一の座具）は、胡座や正座、さらに倚座まで広い座面と座法で自由な身動き（動勢）ができる。また長椅子（寝台椅子）や床の類は、ギリシャから東アジア、正倉院宝物の御床と伝統がある。ここでは座－臥姿勢と自由である。一方でスコーンの石を座面下に敷き戴冠式で拘束された姿勢の感がある。

玉座が一定の自由と空間を求めた。キリスト教世界で戴冠式は、天（宇宙）と天下（地上）を軸に教会の十字状空間下で王冠、玉座、王杖といった宝器のもとで進行する。一方、日本における天皇の即位礼の主座となる高御座(註 20)の八角屋形が太子の霊廟的性格を備えた八角堂の歴史(註 19)に通じて、天を冠した天皇が鳳凰、階段を備えた天と通じる高御座という空間装置となり(註 15)、内部の御倚子と三種の神器－八坂瓊（やさかに）の勾玉、八咫（やた）の鏡、草薙（くさなぎ）の剣と共に皇位継承の儀式がすすむ。天皇と英国王の玉座は、共に先祖に溯る歴史を祀る「形」とおよび姿勢の「型」を継承する装置と言える。

［図 3.6］アンテオコ一世頭像（表）－
アポロ神オンフォロス座像（裏）
（註 16-3）

［図 3.7］チャンドラ・グプタ一世玉座像（表），
ラクシュミー神オンフォロス座像（裏）
（註 18 -1）

［図 3.8］セレウコス一世頭像（表）－
ゼウス神倚座像（裏）
（註 16-4）

4. まとめ

本稿は、スクーンの石－旧約聖書にヤコブが神の夢をみた枕石、を敷く英国女王の戴冠式の玉座は、十字軍が持ち去りスコットランドのスクーン城にあったが英国軍が石を奪い、玉座に敷き王権継承の〝死－再生〟の戴冠式で宿敵への封印と勝利の象徴として用いた。玉座で石を鎮める理由をたどると、その一つが地球の核心にある臍（オンフォロス）として地震源とされた石を神が尻に抑えて座るギリシャの世界観にある。石を敷く神の座像は、地中海沿いシリアを経てアジア内陸のバクトリアからヒマラヤ一帯のパルティア、インドのグプタ王朝の貨幣まで広く採用された。以降も石を敷く玉座座像が神や王にふさわしい姿勢の型と玉座の形の表現として続く。

一方物質文明観から玉座は英国王の戴冠式の木製でスクーンの石をしく玉座、天皇即位礼の玉座・高御座が木材（御倚子は欅木）に漆塗りによるなど質素な材料と後処理である。戴冠式で玉座の空間は、歴代王や殉教者の霊廟（マルテリウム）の性格を備えた結界とし、天上の神キリストの〝死－復活・再生〟を象徴する十字架状の天蓋と空間を加え地上で神の代理を果たす王が単に座席の役目を超える玉座に昇段と降下するための階段をつけ、威儀を正して座す。そして儀式は、宝具（神器）を玉座と共に用いる。

現在、英国女王の在位が長期におよぶ。英国国旗（ユニオンジャック）は、白地に赤い聖ジョージの十字模様とスコットランドの青地に白い聖アンドリューの十字斜め模様を組み合わせた連合王国の統一の象徴になっている。一方で英国との分離・独立運動がつづけるスコットランドは、英国支配の象徴の玉座のスクーンの石は、ブレア政権の時、英国からスコットランドへ 1996 年に返還された。その後も 2014 年に英国からの分離独立投票が僅差で否決されたが独立の機運が収まらない。現在英国が欧州連合から離脱表明の混乱のなか、2019 年在位 67 周年を迎えた女王は、義務に忠実で常に威厳ある国王として国民に愛され人気が高い。

日本で天皇の退位をうけ、2019 年 5 月に「令和」の新年号のもと新天皇の一世一代の大嘗祭・即位礼をむかえる。玉座は、椅子と別次元として姿勢の型と玉座の形により伝統ある王朝文化の象徴空間となって輝くと言える。

5. 謝辞

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究・挑戦的萌芽）からの研究助成による。調査は、英国クイーンズハウス、大英博物館、大英図書館ならびにインド国立ニューデリ博物館等の関係者にご協力をいただいた。本稿を借り感謝を申しあげます。

6. 註と参考資料

註 1. 本研究は、科学研究費補助金「玉座とその象徴性の基礎研究」挑戦的研究（萌芽）、課題番号 15K12294、研究代表・服部等作による。研究期間は 2015-2018 年度末、調査は、主に文献と文化財資料（英国クイーンズハウス、大英博物館など）ですすめた。

註 2. 鳥海義之助－昭和 61:『エジプト，ギリシャ，ローマの家具－木の家具』，読売新聞社

註 3. 多木浩二—1992：『椅子の身体論－儀礼と快楽』、眼の隠喩　視線の現象学、青土社

註 4. キリスト教のもとでの戴冠式の玉座は、教会や大聖堂の空間、皇室では御所・清涼殿に備えた高御座（たかみくら）（皇后用は御座（みくら））が主座となり大嘗祭の官中、松の間に移設されて行う。

註 5. メソポタミア・シュメール文明で王権の象徴の玉座、王杖、王冠があり、後に西アジアで伝統化する。英国王室は、戴冠式で玉座、玉杖、王冠の三点、皇室は、八坂瓊勾玉（やさかにのまがたま）、八咫鏡（やたのかがみ）、草薙剣（くさなぎのつるぎ）の三神器がある。

註 6. 欧州は 10 王国（2015 年）があるが、立憲君主制をとる英国をはじめ、ノルウェー、スエーデン、デンマーク、オランダ、スペイン、ベルギー、モナコ、ルクセンブルグ大公国リヒテンシュタインがある。

註 7. ホカ - ト , A.M. － 1990, 橋本和也(訳)：『王権』,pp.87-121, 人文書院 :、戴冠式で 26 の要素をあげる。

註 8. Graham, Clare-1994: Ceremonial and Commemorative Chairs in Great Britain, pp.32-53,1）Pl.47,2）Pl.46, フランスのバイヨー製とされるが英国製の可能性を残す。Victoria & Albert Museum

註 9. 英国女王になる前のエリザベスの実名は、Elizabeth Alexandra Mary で、植民地のケニアを視察中で木にのぼる前の王女が木からおりて英国連邦 16 国の頂点に立つ 27 歳の英国王となった。在位 1952 年 2 月 6 日～現在に至り高祖母たるヴィクトリア女王を抜いて英国史上最高齢の君主、存命する在位中の君主の中で世界最高齢である。

註 10. 日本聖書協会－ 2004：『旧約聖書 - 創世記 28 章』、（新共同訳）、ヤコブは、イサクの息子でイスラエルの名のもとユダヤ人の祖となる。ヤコブの石が後にスコーンの石とされる。油はオリーブ油である。

註 11. 註 8.p.35 参照、即位は、忠誠の宣誓のため玉座につくが着席を拒否された女王メアリの時の理由は、エドワード II 世のために座面が汚れていたためで例外的に座席の洗浄が認められたことがある。

註 12. H・C・トランブル『敷居上での契約』エジンバラ，一八九六年 ,p.286 頁他）

註 13. O. ケール著　山折哲雄（訳）－ 1972：『旧約聖書の象徴世界』、古代オリエントの美術と「詩編」、教文館
マッツェバは、ギリシャ神話におけるアンブロシアー不死なる神々の食べ物にバター、油、蜜が注ぐとする。碑文の

下に泉（図 183-188,p.256 参照）、マッツェバの右にオリーブ木（図 180-182、p.253-255 参照）を描く。

註 14. ギリシア神話の男神アポロン（アポローン）は、オリュンポス十二神の一柱で全能神ゼウスの息子となる。ギリシアでは理想の青年像とされデルファイで守護神となるが、ヘーリオス・太陽神と同一視され、光明の神、病を払う治療神、音楽・芸術の神、精霊神が転じ牧畜と羊飼いの守護神、神託を授ける予言の神の面も名高く多面的な性格がある。その起源が小アジアとされ、ミケーネ文明で大地の母神ガイヤからこの地を浄めた説、本来の遊牧民起源説がある。

註 15. Sear D.R. ― 2000:Greek Coins and their values,Vol. 1-Europe, 1）Pl.2365、B.C.336 年発行、2）: Pl.2689、B.C.280-234. 年発行、Vol. II-3）Pl.2303、B.C.280-261. 年発行、4）Pl.6829、B.C.312-280 年発行、B.A.Seaby Ltd.London,

註 16. Osmund Bopearachchi-2003 : De l'Indus à l'Oxus: Archélogie de l'Asie Centrale.（catalogue De l'exposition）, 1）Pl.45　発行前 280-261 年、Ass. IMAGO Pub.

註 17. Pratapaditya Pal-1986: Indian Sclupture（Circa 500 B.C.-A.D.700 ,A Catalogue of the Los Angels country museum of art Collection Vol.1,1）c29ab,Univ.of California Press, Los Angels,

註 18. 白川静 -2000：『字通』、1）倚は 10 画　2422 で訓義が 1. よる、よりそう。2. もたれる、まかせる、たよる。2）坐（座）は 7 画　8810（10 画 0021・当用漢字）で訓義が 1. 裁判の坐に連なる、罪に坐する、当事者として法廷に坐る。2.すわる、ひざまずいてすわる、平凡社、

註 19. 日本建築学会（編）-1987：『日本建築史図集』・新訂版、彰国社 PP・18、八角円堂

註 20. 服部等作 -2018：『大嘗祭•即位礼の高御座』―分身の神話、篠田知和基（編）、pp. 115–121、GRMC 比較神話学研究会、筑波大学茗荷谷校、楽瑯書院、

註 21. Cuzma,S-1985:Kushan Sclupture:Image from early India, The Cleaveland Museum of Art ,